

革命期の国家

われわれには国家が必要であるが、それは、ブルジョアジーが必要としているような国家、すなわち、警察、軍隊、官僚制度（官吏制度）というような、人民から分離し、人民に対立する権力機関をもった、そういう国家ではない。いっさいのブルジョア革命はみな、この国家機構をいっそう完全にただけであり、それを一つの党の手から別の党の手へうつただけであった。

だが、プロレタリアートは、もし彼らが現在の革命の達成物をまもりぬき、さらに前進し、平和とパンと自由をたたかいてとろうとのぞむなら、マルクスの言葉を借りていえば、この「できあいの」国家機構を「破砕し」、警察や軍隊や官僚制度を、武装した全人民と融合させることによって、これを新しい国家機構でおきかえなければならない。1871年のパリ・コンミュンと1905年のロシア革命との経験がしめした道をすすみながら、プロレタリアートは、住民中の貧しい被搾取層の全員を組織し、武装させ、こうして彼らがみずから国家権力の諸機関を直接に自分の手ににぎり、みずからこの権力の諸機関となるようにしなければならない。

そして、ロシアの労働者は、すでに最初の革命の最初の段階の時期に、すなわち1917年2月＝3月に、この道に踏みいったのである。いまや全任務は、この新しい道がどのようなものであるかをはっきりと理解すること、——この道を大胆に、しっかりと、ねばりつよくさらに前進することである。

イギリス＝フランスの資本家とロシアの資本家は、旧国家機構、警察、軍隊、官吏制度には手を触れないで、「たんに」ニコライ二世を更迭させるか、あるいはむしろ「ちょっとおどそう」とのぞんだだけであった。

労働者はそれ以上にすすみ、この旧国家機構を破砕した。そこで、いまではイギリス＝フランスの資本家ばかりか、ドイツの資本家までが、たとえばロシアの兵士が自分たちの将校を、それがグチコフやミリュコフの味方のネペーニン提督であろうとかまわずに射殺したのを見て、怒りと恐怖でほえたてている。

私はいま、労働者がそれを、旧国家機構を破砕した、と述べた。もっと正確に言えば、それを破砕しはじめたのである。

具体的な例を取ってみよう。

警察は、ピーテルその他多くの地方で、一部は撃破され、一部は更迭された。グチコフ＝ミリュコフ政府は、人民から分離し、人民に対立した、ブルジョアジーの指揮下にある武装した人間の特別の組織としての警察を復活させないでは、君主制を復活させることも、総じて権力を保持することも、できないであろう。このことは、火を見るよりも明らかである。

他方では、新政府は、革命的人民に考慮をほらい、いいかげんな口約束を人民にたっぷりふるまい、時をかせがないわけにはいかない。そこで、政府は、中途半端な方策に訴える。政府は、選挙による上官をいただく「人民民兵」をもうける（これはおそろしく体裁よく聞える！ おそろしく民主主義的に、革命的に、りっぱに聞える！）が——しかし……しかし、第一に、政府はそれを、ゼムストヴォおよび都市自治体の監督のもとに、指揮

のもとに、つまり、血帝ニコライと絞刑吏ストルイピンとがつくった法律によってえられた地主と資本家の指揮のもとに、おこうとしている！ 第二に、「人民」の目をくらすために、民兵を「人民」民兵と呼びながらも、政府は、**実際には、全人民にこの民兵への参加を呼びかけてはおらず、また、職員や労働者が公務すなわち民兵勤務にあたる時間と日にたいして、普通の賃金を支払う義務を、雇主や資本家に課してもいない。**

これがかんじんかなめのことである。……

警察を復活させてはならない！ 地方権力を手ばなしてはならない！ プロレタリアートに指導される、真に全人民的な、全国民を参加させた民兵をつくりだすべきである！——これがこんにちの任務であり、これが、今後の階級闘争、今後の革命運動のただしく理解された利益にもかない、また、警察や村巡査や地方警部をにくまずにはおられず、人民を支配する権力をあたえられた武装した人間を地主や資本家が指揮するのをにくまずにはいられないすべての労働者、すべての農民、すべての勤労・被搾取者の民主主義的本能にもかなった、当面のスローガンである。

彼らには、グチコフやミリュコフらには、地主や資本家には、どのような警察が必要であろうか？ ………

われわれには、プロレタリアートには、すべての勤労者には、どのような民兵が必要であろうか？ 真に**人民的な**民兵、すなわち、第一には、全国民から、**男女を問わず**すべての成年市民からなり、第二には、人民軍隊の機能と、警察の機能、国家秩序および国家行政の主要な基本的機関の機能とを一つにあわせた民兵である。

これらの命題をいっそう明瞭にするために、純然たる図式上の例を取ろう。どんなものにせよプロレタリア民兵の「計画」をつくろうと考えることがばかげていることは、いうまでもない。労働者と全人民がほんとうに大衆的に、実践的にこの仕事にとりくむなら、彼らは、どんな理論家よりも百倍もうまくそれを仕上げ、ととのえるであろう。私は「計画」を提案しようとしているのではなく、ただ、自分の考えを例解したいだけである。

ピーテルには、約 200 万人の住民がいる。その半数以上が 15 歳から 65 歳までのものである。これを半数だとしよう。そうすると、100 万人になる。さらに、病人その他、正当な理由でいまのところ公務に参加しえないものとして、まる四分の一をのぞこう。そうすると 75 万人がのこる。この 75 万人が、かりに十五日間に一日だけ民兵として勤務する（そして、この一日にたいして、ひきつづき雇主から支払を受ける）ものとすれば、兵力 5 万の軍隊ができるであろう。

まさに**こういう型**の「国家」が、われわれには必要なのである！

まさに**こういう**民兵こそ、言葉のうえだけでなく、実際に「人民民兵」であろう。

まさに**こういう**道によって、われわれは、特別な警察にせよ、人民から分離した特別な軍隊にせよ、その復活を**不可能**にしなければならない。

このような民兵は、95 %まで労働者と農民からなっているであろうし、**ほんとうに**人民の圧倒的多数の理性と意志、力量と権力を表現するものであろう。このような民兵こそ、ほんとうに全人民を武装させ、彼らに軍事知識をほどこし、反動を復活させようとするあらゆる試み、ツァーリの手先のあらゆる奸策から、グチコフ流やミリュコフ流**ではない**やり方で、全人民をまもるであろう。このような民兵は、「労働者・兵士代表ソヴェト」の執行機関であるだろうし、人民の**絶対的な**尊敬と信頼をかちとるであろう。なぜなら、そ

れ自体、全人民の組織だからである。このような民兵は、民主主義を、資本家による人民の奴隷化と人民の愚弄とをおおいかくす美しい看板から、あらゆる国務に大衆を参加させるための真の大衆教育にならせるであろう。このような民兵は、言葉によるだけでなく、行動によって、活動によって未成年者を教育して、彼らを政治生活へ引き入れるであろう。このような民兵は、学者ふうの言い方をすれば、「福利警察」の管轄に属する諸機能、すなわち保健衛生上の監督等を発展させ、すべての成年婦人をこの種の仕事に引き入れるであろう。ところで、婦人を公務へ、民兵へ、政治生活へ引き入れずには、婦人を愚鈍化する家事や、台所仕事の環境から婦人を引きださずには、真の自由を保障することはできないし、社会主義はおろか、民主主義さえ建設することはできない。

このような民兵は、プロレタリア民兵であろう。なぜなら、都市の工業労働者は、彼らが1905～1907年にも、1917年にも、人民の革命闘争全体のなかで当然かつ不可避的地位を占めたのと同様に、おなじく当然かつ不可避的に、民兵のなかで貧民大衆にたいする指導的な影響力をもつだろうからである。

このような民兵は、絶対的な秩序と、私心なく実現される同志的規律とを保障するであろう。だが、同時にそれは、すべての交戦国が際会している重大な危機にあたって、この危機と真に民主的にたたかい、パンその他の物資の公正で迅速な割当てを実現し、またフランス人がこんにち「国民動員」と呼び、ドイツ人が「国民勤労義務」と呼んでいる「全般的労働義務」を実施する可能性をあたえるであろう。そして、このような「全般的労働義務」を実施しないでは、恐ろしい強盗戦争でこうむった、またなおこうむりつつある傷手をいやすことはできない、——できないことが明らかになっている。

ロシアのプロレタリアートが自分の血をながしたのは、単なる政治上の民主主義的改良の大げさな約束を手に入れるだけのためだったのか？ 彼らは、すべての勤労者が、自分の生活がいくぶん良くなったことをいまず見てとり、また感ずるようになることを、要求し、またそうならせるのではなからうか？ どの家族にもみなパンがあることを、どの幼児にもみな上等の牛乳が一壇行きわたることを、また子供たちに牛乳が確保されないうちに、金持の家庭の大人が一人でも余分な牛乳をとらないことを、ツァーリや上層貴族がのこしていった宮殿や豪華な邸宅をむだにあけておかないで、宿なしや無産者の宿にあてておくことを、要求、またそうならせるのではなからうか？ 男子と平等の立場で婦人もかならず参加する全人民的民兵のほかに、だれがこういう方策を実現できるであろうか？

こういう方策はまだ社会主義ではない。それらは消費の割当てにかんするものであって、生産の改造にかんするものではない。それらは、まだ「プロレタリアートの独裁」ではなく、「プロレタリアートと貧農の革命的民主主義的独裁」にすぎないであろう。だが、いまかんじなことは、それらを理論的に分類することではない。もしわれわれが、理論を、なによりもまず、なによりも第一に行動の手引と考えないで、複雑な、切実な、急速に発展していく、革命の実践的諸任務を、狭く解した「理論の」杓子定規にあてはめようとするなら、きわめて大きな誤りであろう。

ロシアの労働者大衆のあいだには、彼らが直接の革命闘争で勇氣と創意と自己犠牲の奇跡をあらわしたあとで、「プロレタリア的組織の奇跡」をあらわすだけの自覚と堅忍と英雄精神があるだろうか？ それは、われわれにはわからないし、それについて憶測をめぐらすことは、むだなしわざであろう。なぜなら、このような問にたいする答は、ただ実践

によってのみ、あたえられるからである。

われわれがたしかに知っていること、そして、党として大衆に説明しなければならないこと——それは、一方では、未曾有の危機や、飢餓や、数えきれない災禍を生みだす、きわめて強力な歴史的原動力が、現存しているということである。この原動力というのは、**両**交戦陣営の資本家が、強盜的目的でおこなっている戦争である。この「原動力」は、きわめて豊かな、きわめて自由な、きわめて開明的な一連の諸民族を、深淵のふちに押しやっている。それは、諸国民に、あらゆる力をふりしぼることを**よぎなく**させており、彼らを耐えがたい状態におとしめている。それはなにかの「理論」を実現することをではなく（そういうことは問題にならない。そして、マルクスは、こういう幻想に陥らないように、いつも社会主義者をいましめた）、もっとも徹底的な、実践的に可能な諸方策を実現することを、日程にのぼせている。というのは、徹底的な方策をとらないでは、滅亡するからである。幾百万の人間が飢餓のために、ただちに、無条件に、滅亡するからである。

客観的情勢が全人民に徹底的な方策をとることを要求しているばあいには、先進的階級の革命的熱意が**多くの**ことをなしとげうるといふことは、論証するまでもない。問題のこの側面は、ロシアではだれでもはっきり目撃しており、その身に**感じている**。

革命期には、総じて生活が急速にながれていくように、客観的情勢もまた急速に、急激にうつりかわっていくことを、理解することがたいせつである。そして、われわれは、自分の戦術と自分の当面の任務を、それぞれの情勢の**特殊性に**適応させることができなければならない。1917年2月までは、日程にのぼっていたのは、大胆な革命的、国際主義的の宣伝であり、大衆に闘争を呼びかけ、彼らを目ざめさせることであつた。二月＝三月事件のさいに必要なであつたのは、当面の敵であるツァーリズムをただちに粉砕するための、献身的闘争の英雄精神であつた。いまやわれわれは、革命のこの最初の段階から第二の段階への、ツァーリズムとの「格闘」から、グチコフ＝ミリュコフの地主的＝資本主義的帝国主義との「格闘」にうつる**過渡**に際会している。いま日程にのぼっているのは、組織上の任務である。だが、それは、けっして、もっぱら紋切型の組織のための活動という紋切型の意味ではなく、かつてなかつたほど広範な被抑圧階級の大衆を組織に引き入れ、軍事的、全国的、国民経済的諸任務をこの組織そのものに体现させるという意味においてである。

プロレタリアートはさまざまな道をとおって、この特異な任務にとりかかっており、またとりかかるであろう。ロシアのある地方では、二月＝三月革命はプロレタリアートの手にほとんど完全な権力をあたえている。別の地方では、プロレタリアートは、おそらく「奪取」というやり方でプロレタリア民兵を創設し、拡大しはじめるであろう。また別の地方では、プロレタリア的組織性の成長や、兵士と労働者の接近や、農民のあいだの運動や、グチコフ＝ミリュコフの軍事的＝帝国主義的政府の適格性にたいする数多くの人々の幻滅が、この政府を労働者代表ソヴェトの政府におきかえる時を近づけるまでは、プロレタリアートは、おそらく、普通等々の選挙権にもとづいて、市議会やゼムストヴォの即時改選をかちとり、こうしてそれらを革命的中心点にするようつとめるであろう、等々。

われわれはまた、もっともすすんだ、事実上の共和国の一つ、フィンランドが、ピーテルのまぢかにあることをわすれないようにしよう。フィンランドは、1905年から1917年まで、ロシア国内の革命闘争に掩護されて、比較的平和のうちに民主主義を発展させ、人

民の**大多数**を社会主義の味方に獲得してきた。ロシアのプロレタリアートは、フィンランド共和国にたいし、分離の自由をもふくむ**完全な自由**を保障し（ヘルシングフォルスでカデットのロヂーチェフが大ロシア人のために特権のかけらをせしめようとしてひどくみっともない取引をやっている現在では、社会民主主義者はおそらくだれひとりこの点で動揺するものはないであろう）、まさにこのことによって、フィンランドの労働者の**完全な信頼**と、全ロシアのプロレタリアートの事業にたいする彼らの同志的援助をかりとるのである。困難な大事業では誤りは避けられない——われわれにしても、これはまぬかれない——が、フィンランドの労働者は、よりすぐれた組織者である。彼らは、この方面でわれわれをたすけてくれるであろう。彼らは、**彼らなりのやり方で**、社会主義的共和国の設立をおしすすめるであろう。

ロシアそのものでは幾多の革命的勝利、——フィンランドでは、これらの勝利に掩護されて平和的な組織上の成功、ロシアの労働者は新しい規模の革命的な組織上の任務に移行する——プロレタリアートおよび貧困住民層による権力の獲得——西欧社会主義革命が鼓舞され発展する——、これが、われわれを**平和と社会主義**とに導く道である。

注)……は本文中の表記、……は青山の略

エヌ・レーニン

チューリヒ、1917年3月11(24)日

第23巻 P358~365 「遠方からの手紙」

〈ロシア革命におけるロシア社会民主労働党の任務について〉

〈講演要旨〉

二時間半にわたるレーニンの講演は、二つの部分からなっている。……

この**過渡的な状態**に照応する当面の特殊な任務は、**プロレタリアートを組織すること**である。ただし、それは、あらゆる国の社会主義の裏切者、社会愛国主義者、日和見主義者もまたカウツキー主義者も満足しているような絞切型の組織ではなくて、**革命的な組織**でなければならない。この組織は、第一に、全人民的なものでなければならないし、第二に、**軍事的機能と国家的機能**とを結合していなければならない。

第二インタナショナルを支配していた日和見主義者は、革命期の国家にかんする、マルクスとエンゲルスの学説をねじまげた。カウツキーも、パンネクックとの論争(1912年)で、マルクスの見地を放棄してしまった。マルクスは、1871年のコンミューンの経験からまなんで、つぎのようにおしえている。すなわち、「労働者階級は、できあいの国家機構をそのままわが手ににぎって、自分自身の目的のためにつかうことはできない」〔第11巻、324ページ〕。プロレタリアートはこの機構(常備軍、警察、官僚制度)を**破碎**しなければならない。これは、日和見主義者(社会愛国主義者)とカウツキー主義者(社会平和主義者)が異論をとるか、あるいはごまかそうとしていることである。これは、パリ・コンミューンと1905年のロシア革命の**もっとも重要な実践的教訓**である。

革命的変革のために**国家**の必要をみとめる点で、われわれは、無政府主義者と異なっている。だが、われわれに必要なのは、どんなに民主的な共和国であれブルジョア共和国に存在するような、「できあいの」国家機構ではなくて、**武装し、組織された労働者の直接の権力**であると言明する点で、われわれは、日和見主義者とカウツキー主義者とは異なっ

ている。これこそ、われわれが必要とする国家である。1871年のコンミュンと1905年および1917年の労働者代表ソヴェトは、本質上、このような国家であった。われわれは、今後、この土台のうえに建設していかなければならない。警察を復活させてはならない。人民の民兵から、プロレタリアートに指導される真に全人民的な民兵をつくりだし、民兵として勤務した日数にたいして資本家が労働者に手当を支払うような「われわれの国家」をつくりだすべきである。プロレタリアートがきのうはツァーリズムとの闘争で発揮し、あすはグチコフ＝ミリュコフ一派との闘争であらわすであろう「プロレタリア的英雄精神の奇跡」を、さらに「プロレタリア的組織の奇跡」で補足しなければならない。これこそ、当面のスローガンだ！ これこそ、成功の保証だ！

飢餓、パンの配給の必要、「国民勤労義務」の不可避性、平和をたたかいとる必要、といったような客観的諸条件が、労働者をこの道へおしやっている。レーニンはこう述べた。われわれの講和の条件はつぎのようなものである。すなわち、(1)革命政府としての労働者代表ソヴェトは、ツァーリズムがむすんだ条約でも、ブルジョアジーがむすんだ条約でも、どんな条約にも拘束されない、と声明する。(2)労働者代表ソヴェトは、ただちに、これらの卑劣な略奪的条約を公表する。(3)労働者代表ソヴェトは、すべての交戦国に即時休戦を公然と提案する。(4)労働者代表ソヴェトは、すべての植民地と権利の平等でないすべての民族との解放という条件にもとづいて、講和を提案する。(5)労働者代表ソヴェトは、諸国のブルジョア政府を信頼しないと、万国の労働者に、ブルジョア政府を打倒するよう呼びかける。(6)労働者代表ソヴェトは、戦債を負ったのはブルジョアジーであるから、それを資本家に支払わせよと声明する。

これこそ、労働者・貧農双方の大多数を、労働者代表ソヴェトの味方につけることのできる政策である。地主所有地の没収は、確実に遂行されるであろう、それはまだ社会主義ではない。それは、平和と自由とパンを保障する、労働者と貧農の勝利であろう。このような講和条件のためにこそ、われわれも革命戦争に同意する！ 社会民主党はこの種の革命戦争をこばむものではない、とすでに『ソツィアル＝デモクラート』第47号（1915年10月3日号）で言明されていること〔本全集、第21巻、416～419ページ〕を、レーニンは注意した。万国の社会主義的プロレタリアートの援助を確保すべきである。社会愛国主義者の卑劣な呼びかけ（恥しらずなゲードの手紙、「まず勝利、そのあとで共和制」といったような）は、雲散霧消させなければならない。

報告者はつぎのようにむすんだ。ロシア革命万歳！火蓋をきった世界労働者革命万歳！（注）……………は青山の略

第23巻 P392～393 『ロシア革命におけるロシア社会民主労働党の任務について』

1917年3月15～16日（28～29日）に執筆

1917年3月31日と4月2日に新聞『フォルクスレヒト』に発表

ポイント

この過渡的な状態に照応する当面の特殊な任務は、プロレタリアートを組織することである。プロレタリアートは、もし彼らが現在の革命の達成物をまもりぬき、さらに前進し、平和とパンと自由をたたかいてろうとのぞむなら、マルクスの言葉を借りていえば、この

「できあいの」国家機構を「破碎し」、警察や軍隊や官僚制度を、武装した全人民と融合させることによって、これを新しい国家機構でおきかえなければならない。1871年のパリ・コンミュンと1905年のロシア革命との経験がしめした道をすすみながら、プロレタリアートは、住民中の貧しい被搾取層の全員を組織し、武装させ、こうして彼らがみずから国家権力の諸機関を直接に自分の手ににぎり、みずからこの権力の諸機関となるようにしなければならない。

この組織は、第一に、全人民的なものでなければならないし、第二に、軍事的機能と国家的機能とを結合していなければならない。「プロレタリア的英雄精神の奇跡」を、さらに「プロレタリア的組織の奇跡」で補足しなければならない。これこそ、当面のスローガンだ！ これこそ、成功の保証だ！

客観的情勢が全人民に徹底的な方策をとることを要求しているばあいには、先進的階級の革命的熱意が多くのことなしとげうるということは、論証するまでもない。問題のこの側面は、ロシアではだれでもはっきり目撃しており、その身に感じている。

革命期には、総じて生活が急速にながれていくように、客観的情勢もまた急速に、急激にうつりかわっていくことを、理解することがたいせつである。そして、われわれは、自分の戦術と自分の当面の任務を、それぞれの情勢の特殊性に適応させることができなければならない。1917年2月までは、日程にのぼっていたのは、大胆な革命的、国際主義的宣伝であり、大衆に闘争を呼びかけ、彼らを目ざめさせることであつた。二月＝三月事件のさいに必要であつたのは、当面の敵であるツァーリズムをただちに粉碎するための、献身的闘争の英雄精神であつた。いまやわれわれは、革命のこの最初の段階から第二の段階への、ツァーリズムとの「格闘」から、グチコフ＝ミリュコフの地主的＝資本主義的帝国主義との「格闘」にうつる過渡に際会している。いま日程にのぼっているのは、組織上の任務である。だが、それは、けっして、もっぱら紋切型の組織のための活動という紋切型の意味ではなく、かつてなかつたほど広範な被抑圧階級の大衆を組織に引き入れ、軍事的、全国的、国民経済的諸任務をこの組織そのものに体現させるという意味においてである。その核心にあるものは **by the people** の思想である。